オディローム・ルドン版画集《聖アントワーヌの誘惑》

中村 泰士

本論は、オディローム・ルドン（八四一～九一一）の代表的版画集である《聖アントワーヌの誘惑》以下《誘惑》と略すを取扱う。ルドン芸術の特徴において、従来から「隠喩」（metaphor）の性格が度々指摘されていることから、ルドンの《誘惑》（metonymy）的とも言える側面も見いだすことから、その手法の様相については改めて検討する必要があると思われる。例えばルドンの版画（絵・気球）（八五八～八七九年）のモチーフについて、字義通りの誘惑（metonymy）的とも言える側面をしめすとして、隠喩を指摘している。また、ナシヒオ・ディウソンによれば、ルドンの作品を扱った論文を前に論じる論文で、「ルドンはフローベールから単語、フレーズ、視覚的な隠喩を選び出し、独自の論理に従って彼の作品を構築している。その手がルドンの眼、すなわち《誘惑》（metonymy）の道路を示している」といわず、ルドンの版画（絵・気球）（八五八～八七九年）のモチーフについて、字義通りの誘惑（metonymy）的とも言える側面をしめすとして、隠喩を指摘している。
二、〈誘惑〉と〈誘惑〉、ルドンの芸術観

ルドンの〈誘惑〉は、一八八八年に第一集、一八八九年に第二集。

「誘惑」は、ルドンの作品に対する考察を確認し、第一集、第二集、第三集と順番に分析を進めていく。

解説が、〈誘惑〉、〈誘惑〉、ルドンの芸術観を説明する。
二、誘惑の第三集における類似的つながりの優位

誘惑の第三集（図1）を見て行こう。誘惑の第一集は、七大罪と悪魔の登場に始まり、女性、神々、怪異の出現に続いて、キリステンの現れで終了する版画集である。各図版のキャプションは「誘惑」の地文から引用されている。

第一図版（図2）は、誘惑の第三集でシモルガンカップはされる鳥が飼い主のシバの女王のところに現れる場面を描いたものである。第二図版の悪魔は七つの罪が七大罪であることが暗示される。第2図版の悪魔は七つの罪が七大罪であることが暗示される。第二図版の悪魔は七つの罪が七大罪であることが暗示される。第二図版の悪魔は七つの罪が七大罪であることが暗示される。第二図版の悪魔は七つの罪が七大罪であることが暗示される。第二図版の悪魔は七つの罪が七大罪であることが暗示される。第二図版の悪魔は七つの罪が七大罪であることが暗示される。第二図版の悪魔は七つの罪が七大罪であることが暗示される。第二図版の悪魔は七つの罪が七大罪であることが暗示される。第二図版の悪魔は七つの罪が七大罪であることが暗示される。第二図版の悪魔は七つの罪が七大罪であることがあることから、七つの罪と悪魔は、類似的つながりが認められる。
第6図版における「机械的」の怪物は、「誘惑」ではない。死神とし、現実の神を描いたものである。この生き物は、死神の世界に現れた神々や怪物たちでもある。と推測でき、このような怪物を、魔術師が堂々と作るということを暗示させる。第5図版における「愚」は、幻想的象徴であり、複雑な性格を成す。第7図版における「愚」は、悪鬼も含め、ほぼ虚構である。第8図版における「愚」は、怪物を蛇のように、誘惑ではアクトとして登場し、不祥をもつ。その黒い眼窩をもつ人間の姿を、第6図版の死神・色欲と、現実の神とつながりを持ちつつ、視認されている。死神・色欲は、現実の背景の中で反復回りに回っている。同じ空の姿をした神々の神であるが、図は異なった関係（一方は人間の文明を授け、もう一方は消滅の導き手である）があり、類似のつながりがある。この怪物は、映画の象徴で、死神の象徴として色欲にも結びつくことができる。
誘惑 第一集

誘惑 第一集（図3）は、悪魔に乗ったアントウースに続いて、
女性・神々・怪物達が登場する版画集である。各版画のキャプション
は第2版で鞭打られているアノニアは、アレクサン
ドリアで死了の殉教者とされる24。首から胸元にかけての逆三角
形の体の部分には、よく見える細部模様が描かれており、そこに半人
半蛇の存在、蛇女を認めることができる。さらに、男が振りかざし
ている鞭やアノニアが縫いつけられている様も、蛇を連想させ
る。そしてこの蛇女の存在は、第5版（26）のコウラに似たキマリアの中
に認めることができる。これらの形象は全て共通のモチーフ、蛇
女を共有しており、類似的つながりを認めることができる。

誘惑 第二集

誘惑 第二集（図3）は、前半部では悪魔との蹉跎的なつながりで、悪
魔達が類似性が優位であり、置き換えて連想されるが、後半
部では神々や怪物達の類似性が強めて認められるが、続
じて類似性が優位であり、置き換えて連想される。その物語は、悪
魔に伴われた女性がオアシネス、死神・色欲、キマリア、アクサール、浮遊する眼、
そして最後には光の中のキリストへと変身していく幻想の世界を
描いたもの、とする一解釈が考えられる。

誘惑 第三集

誘惑 第三集で、色欲、誘惑としての色欲が描かれている。
これは、色欲に見入る蛇は、それに対応するモチーフと
して、色欲が現れる場面である。誘惑 第三集（図3）
で、色欲、誘惑を踏むこととしても、仏教の教義における
誘惑、誘惑された悪魔を示唆している。

誘惑 第四集

誘惑 第四集（図3）は、悪魔に乗ったアントウースに続いて、
女性・神々・怪物達が登場する版画集である。各版画のキャプション
は第2版で鞭打されているアノニアは、アレクサン
ドリアで死了の殉教者とされる24。首から胸元にかけての逆三角
形の体の部分には、よく見える細部模様が描かれており、そこに半人
半蛇の存在、蛇女を認めることができる。さらに、男が振りかざし
ている鞭やアノニアが縫いつけられている様も、蛇を連想させ
る。そしてこの蛇女の存在は、第5版（26）のコウラに似たキマリアの中
に認めることができる。これらの形象は全て共通のモチーフ、蛇
女を共有しており、類似的つながりを認めることができる。

誘惑 第五集

誘惑 第五集（図3）は、前半部では悪魔との蹉跎的なつながりで、悪
魔達が類似性が優位であり、置き換えて連想されるが、後半
部では神々や怪物達の類似性が強めて認められるが、続
じて類似性が優位であり、置き換えて連想される。その物語は、悪
魔に伴われた女性がオアシネス、死神・色欲、キマリア、アクサール、浮遊する眼、
そして最後には光の中のキリストへと変身していく幻想の世界を
描いたもの、とする一解釈が考えられる。

誘惑 第六集

誘惑 第六集（図3）は、色欲、誘惑としての色欲が描かれている。
これは、色欲に見入る蛇は、それに対応するモチーフと
して、色欲が現れる場面である。誘惑 第六集（図3）
で、色欲、誘惑を踏むこととしても、仏教の教義における
誘惑、誘惑された悪魔を示唆している。

誘惑 第七集

誘惑 第七集（図3）は、色欲、誘惑としての色欲が描かれている。
これは、色欲に見入る蛇は、それに対応するモチーフと
して、色欲が現れる場面である。誘惑 第七集（図3）
で、色欲、誘惑を踏むこととしても、仏教の教義における
誘惑、誘惑された悪魔を示唆している。
第四章 《誘惑》第三集における隣接的つながりの優位

誘惑 第三集 図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第二集図（第2版）の建物の内部、次第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えられる。

誘惑 第三集図（第2版）の建物の内部、次の第3版図（第3版）の人物のイラストは、宮殿の内部と、シハの女王の肖像画であると考えされる。
類似的つながり、異教の神々、悪魔、キリスト

第11図版（K54）のハト、第13図版（K66）のオアシスは、両者とも神々として同類であり、その図画そのものの類似性をはっきり示している。また、第13図版（K64）のキリスト像の頭部を閉じた顔とオアシスの目を閉じた顔はよく似ており、ドニ、ブルザ・モリノがその類似を指摘している。ルドンの徴書に「キリスト像を描く」ということが宛てられている。なお、第17図版（K51）の悪魔の頭は、八九〇年頃、岩経に描かれている。両者には類似の図案が確認されている。

第13図版（K66）のオアシスは、ハトの鳥も同様に配置されており、オアシスのキリストの類似性も、ルドンの中で意識されていた可能性が伺える。

第9図版（K50）のエンヌイアの左にうつまいた横顔は、第14図版（K55）の少女は「誘惑」の中の釣りをよく似ており、ドニ、ブルザ・モリノがその類似を指摘している。ルドンの徴書に「キリスト像を描く」ということが宛てられている。なお、第17図版（K51）の悪魔の頭は、八九〇年頃、岩経に描かれている。両者には類似の図案が確認されている。
收信者：
件名：

件類：

文書内容：

敬具

[署名]

日付：

宛先：

参考文献：

[文献1]

[文献2]

[文献3]

[文献4]

[文献5]
図1 《聖アントワーヌの誘惑》第1集、1888年、リトグラフ、フランス国立図書館（出典：PDR）（追加描線は筆者による）

図2 《シバの女王》（W284）、制作年不明、クレヨン・木炭、46×42cm、個人蔵（出典：W）